具へてゐた。僕なども始終瀧田君に僕の作品を褒められたり、或は又苦心の餘になつた先輩の作品を見せられたり、いろいろ鞭撻を受けた爲にいつの間にかざつと百ばかりの短篇小說を書いてしまつた。これは僕の瀧田君に何よりも感謝したいと思ふことである。

僕は又中央公論社から原稿料を前借する爲に時々瀧田君を煩はした。何でも始めに前借したのは十圓前後の金だつたであらう。僕はその金にも困つた揚句、確か夜の八時頃に瀧田君の舊宅を尋ねて行つた。瀧田君の舊居は西片町から菊坂へ下りる横町にあつた。僕はこの家を尋ねたことは前後にたつた一度しかない。が、未だに門內か庭かに何か白い草花の澤山咲いてゐたのを覺えてゐる。

瀧田君は本職の文藝の外にも書畫や骨董を愛してゐた。僕は今人の作品の外にも、椿岳や雲坪の出來の善いものを幾つか瀧田君に見せて貰つた。勿論僕の見なかつたものにもまだ逸品は多いであらう。が、僕の見た限りでは瀧田コレクションは何と言つても今人の作品に優れてゐた。尤も僕の鑑賞眼は頗る瀧田君には不評判だつた。「どうも芥川さんの美術論は文學論ほど信用出來ないからなあ。」——瀧田君はいつもかう言つて僕のあき盲を嗤つてゐた。

瀧田君が日本の文藝に貢獻する所の多かつたことは僕の贊するのを待たないであらう。しかし當代の文士を擧げて瀧田君の世話になつたと言ふならば、それは故人に侵するとも、故人に信な

る言葉ではあるまい。成程僕等年少の徒は度たび瀧田君に厄介をかけた。けれども瀧田君自身も亦恐らくは德田秋聲氏の如き、或は田山花袋氏の如き、僕等の先輩に負ふ所の少しもない訣ではなかつたであらう。

僕は瀧田君の訃を聞いた夜、室生君と一しよに悔みに行つた。瀧田君は所謂觀魚亭に北を枕に横はつてゐた。僕はその顏を見た時に何とも言はれぬ落莫を感じた。それは僕に親切だつた友人の死んだ爲と言ふよりも、況や僕に寬大だつた編輯者の死んだ爲と言ふよりも、寧ろ唯あの瀧田君と言ふ、大きな情熱家の死んだ爲だつた。僕は中陰を過ごした今でも瀧田君のことを思ひ出す度にまだこの落莫を感じてゐる。瀧田君ほど熱烈に生活した人は日本には滅多にゐないのかも知れない。

夏目先生と瀧田さん

私がまだ赤門を出て間もなく、久米正雄君と一ノ宮へいつた時でした。夏目先生が手紙で「毎木曜日にワルモノグヒが來て、何んでも字を書かせて取つて行く」といふ意味のことを云つて寄越されたので、その手紙を後に瀧田さんに見せると、之はひどいと云つて夏目先生に詰問したの

で、先生が瀧田さんに詫びの手紙を出された話があります。當時夏目先生の面會日は木曜だつたので、私達は畫遊びに行きましたが、瀧田さんは夜行つて玉版箋などに色々のものを書いて貰はれたらしいです。だから夏目先生のものは隨分澤山持つてゐられました。書畫骨董を買ふことが熱心で、瀧田さん自身話されたことですが、何も買ふ氣がなくて日本橋の中通りをぶらついてゐる時、埴輪などを見付けて一時間とたたない中に千圓か千五百圓分を買つたことがあるさうです。まあすべてがその調子でした。震災以來は身體の弱い爲もあつたでせうが蒐集癖は大分薄らいだやうです。最後に會つたのはたしか四五月頃でしたか、新橋演舞場の廊下で誰か後から僕の名を呼ぶのでふり返つて見ても暫く誰だか分らなかつた。あの大きな身體の人が非常に痩せて小さくなつて顏にかすかな赤味がある位でした。私はいつも云つてゐたことですが、瀧田さんは、德富蘇峰、三宅雄二郎の諸氏からずつと下つて僕等よりもつと年の若い人にまで原稿を通じて交渉があつて、色々の作家の逸話を知つてゐられるので、もし今後中央公論の編輯を誰かに讓つて閑な時が來るとしたら、それらの追憶錄を書かれると非常に面白いと思つてゐました。

手紙（夏目金之助宛）

先生

また、手紙を書きます。嘸、この頃の暑さに、我々の長い手紙をお讀になるのは、御迷惑だらうと思ひますが、これも我々のやうな門下生を持つた因果と御あきらめ下さい。その代り、御返事の御心配には及びません。先生へ手紙を書くと云ふ事が、それ自身、我々の滿足なのですから。

今日は、我々のボヘミアンライフを、少し御紹介致します。今居る所は、この家で別莊と稱する十疊と六疊と二間つゞきのかけはなれた一棟ですが、女中はじめ我々以外の人間は、飯の時と夜、床をとる時との外はやつて來ません。これが先、我々の生活を自由ならしめる第一の條件です。我々は、この別莊の天地に、ねまきも、おきまきも一つで、どろどろしてゐます。來る時に二人とも時計を忘れたので、何時に起きて何時に寢るのだか、我々にはさつぱりわかりません。何しろ太陽の高さで、略ゞ見當をつけるんですから、非常に「帳裡日月長」と云ふ氣がします。それから、甚、尾籠ですが、我々は滅多に後架へはいりません。大抵は前の庭のやうな所へ、してしまふのです。砂地で、すぐしみこんでしまひますから、宿の者に發見される惧などは、萬萬

ありません。第一、非常に手輕で、しかも爽快です。さう云ふ始末ですから、部屋の中は、原稿用紙や本や繪の具や枕やはがきで、我ながらだらしがないと思ふ程、雜然紛然としてゐます。私は本來久米などより餘程きれいずきなのですが、この頃はすつかり惡風に感染してしまひました。夜はそのざふもつを、隅の方へつみかさねて、女中に床をとつてもらひます。ふとんやかいまきは、可成清潔ですが、蚊帳は穴があるやうです。やうですと云ふのは、何時でも中に蚊がはいつてゐるからで、實際穴があるかどうか、面倒くさいから、しらべて見た事はありません。その代り、獅噛火鉢を一つ、蚊帳の中へ入れて、その中で盛に、蚊やり線香をいぶしました。久米の說によると、いぶしすぎた晩は、あくる日、頭が痛いさうです。ではよさうかと訊きますと、蚊に食はれるよりは、頭痛のする方がまだいいと云ひます。そこで、やはり每晩、十本位づつ燃やす事にきめました。頭痛はしないまでも、いぶしすぎると、翌日、鼻の穴が少しいぶり臭いやうです、線香さへなくなれば、もういい加減にやめてもいいのですが、こてこて買つて來たので、中中なくなりさうもありません、この頃は、それが少し苦になり出しました。

海へは、雨さへふつてゐなければ、何事を措いてもはひります。ここは波の靜な時でも、外よりは餘程大きなのがきますから、少し風がふくと、文字通りに、波濤洶湧します。一昨日、我々がはいつてゐた時でした。私が少し泳いで、それから脊の立つ所へ來て見ると、どうしたのだか

ゐる筈の久米の姿が見えません。多分先へ上つたのだらうと思つて、砂濱の方へ來て見ますと、果してそこにねころんでゐました。が、いやな顏色をして、兩手で面をおさへながら、うんうん云つてゐるのです、久米は心臟の惡い男ですから、どうかしたのかと思つて、心配しながら訊いて見ますと、實は、無理に遠くまで泳いで行つた爲にくたびれて歸れなくなつた所へ、何度も頭から波をかぶつたので、大へん苦しんだのださうです。さうして、あまり鹹い水をのんだので、もうこれは駄目かなと思つたのださうです。では又、何故そんなに遠くへ行つたのだと云ひますと、女でさへ泳いでゐるのに、男が泳げなくちや外聞がわるいと思つて、奮發したのだと云ふ事でした。つまらない見えをしたものです。事によると、この女なるものが、尋常一樣の女ではなくつて、久米のほれてゐる女だつたかもしれません。女と云へば、きれいな女は一人もゐませんが、黑の海水着に、赤や綠の頭巾をかぶつた女の子が、水につかつてゐるのはきれいです。彼等は、全身が歡喜のやうに、躍つたり、跳ねたりしてゐます。さうして、蟹が一つ這つてゐても、面白さうにころがつて笑ひます。濱菊のさいてゐる砂丘と海とを背景にして、彼等の一人をワツトマンへ畫かうと云ふ計畫があるんですが、まだ着手しません。畫は、新思潮社同人中で、久米が一番早くはじめました。何でも大下藤次郎氏か三宅克己氏の弟子か何かになつたのかも知れません。とにかく、セザンヌの孫弟子位には、かけるさうです。同人の中には、まだ松岡も畫をか

きます、しかし、彼の畫は、倒にして見ても横にして見ても、差支へないと云ふ特色がある位ですから、まあ私と五十歩百歩でせう。それでも二人とも、ピカソ位には行つてゐると云ふ自信があります。

いよいよ九月の一日が近づくので、あんまりいい氣はしません。先生にあやまつて頂くよりは、御禮を云ふやうになる事を祈つてゐます。

今日、チエホフの新しく英譯された短篇をよんだのですが、あれは容易に輕蔑出來ません。あの位になるのも、一生の仕事なんでせう。ソログウブを私が大に輕蔑したやうに、久米は書きましたが、そんなに輕蔑はしてゐません。ずゐぶん頭の下るやうなパツセエヂも、たくさんあります。唯、ウエルスの短篇だけは、輕蔑しました。あんな俗小說家が聲名があるのなら、英國の文壇よりも、日本の文壇の方が進歩してゐさうな氣がします。

我々は海岸で、運動をして、盛に飯を食つてゐるんですから、健康の心配は入りませんが、先生は、東京で暑いのに、小說をかいてお出でになるんですから、さうはゆきません、どうかお體を御大事になすつて下さい。修善寺の御病氣以來、實際、我々は、先生がねてお出でになると云ふとひやひやします。先生は少くとも、我々ライズィングジェネレエションの爲めに、何時も御丈夫でなければいけません、これでやめます。

八月二十八日

夏目金之助樣　梧下

芥川龍之介

この手紙は大正五年八月二十八日、一ノ宮から發したものである。

小品

漱石山房の秋

夜寒の細い往來を爪先上りに上つて行くと、古ぼけた板屋根の門の前へ出る。門には電燈がともつてゐるが、柱に掲げた標札の如きは、殆ど有無さへも判然しない。門をくぐると砂利が敷いてあつて、その又砂利の上には庭樹の落葉が紛々として亂れてゐる。

砂利と落葉とを踏んで玄關へ來ると、これも亦古ぼけた格子戸の外は、壁と云はず壁板と云はず、悉く蔦に蔽はれてゐる。だから案内を請はうと思つたら、まづその蔦の枯葉をかさつかせて、呼鈴の鈕を探さねばならぬ。それでもやつと呼鈴を押すと、明りのさしてゐる障子が開いて、束髪に結つた女中が一人、すぐに格子戸の掛け金を外してくれる。玄關の東側には廊下があり、その廊下の欄干の外には、冬を知らない木賊の色が一面に庭を埋めてゐるが、客間の硝子戸を洩れる電燈の光も、今は其處までは照らしてゐない。いや、その光がさしてゐるだけに、向うの軒先に吊した風鐸の影も、反つて濃くなつた宵闇の中に隱されてゐる位である。

硝子戸から客間を覗いて見ると、雨漏りの痕と鼠の食つた穴とが、白い紙張りの天井に斑々とまだ殘つてゐる。が、十疊の座敷には、赤い五羽鶴の毯が敷いてあるから、疊の古びだけは分明でない。この客間の西側（玄關寄り）には、更紗の唐紙が二枚あつて、その一枚の上に古色を帶びた壁懸けが一つ下つてゐる。麻の地に黄色に百合のやうな花を繡つたのは、津田青楓氏か何かの圖案らしい。この唐紙の左右の壁際には、餘り上等でない硝子戸の本箱があつて、その何段かの棚の上にはぎつしり洋書が詰まつてゐる。それから廊下に接した南側には、殺風景な鐵格子の西洋窓の前に大きな紫檀の机を据ゑて、その上に硯や筆立てが、紙絹の類や法帖と一しよに、存外行儀よく並べてある。その窓を剩した南側の壁と向うの北側の壁とには、殆ど軸の掛かつてゐなかつた事がない。藏澤の墨竹が黄興の「文章千古事」と挨拶をしてゐる事もある。木庵の「花開萬國春」が吳昌蹟の木蓮と鉢合せをしてゐる事もある。が、客間を飾つてゐる書畫は獨りこれらの軸ばかりではない。西側の壁には安井曾太郎氏の油繪の風景畫が、東側の壁には齋藤與里氏の油繪の艸花が、さうして又北側の壁には明月禪師の無絃琴と云ふ艸書の横物が、いづれも額になつて掛かつてゐる。その額の下や軸の前に、或は銅瓶に梅もどきが、或は青磁に菊の花がその時々で投げこんであるのは、無論奥さんの風流に相違あるまい。

もし先客がなかつたなら、この客間を覗いた眼を更に次の間へ轉じなければならぬ。次の間と

云つても客間の東側には、唐紙も何もないのだから、實は一つ座敷も同じ事である。唯此處は板敷で、中央に擴げた方一間あまりの古絨毯の外には、一枚の疊も敷いてはない。さうして東と北と二方の壁には、新古和漢洋の書物を詰めた、無暗に大きな書棚が並んでゐる。書物はそれでも詰まり切らないのか、ぢかに下の床の上へ積んである數も少くない。その上やはり南側の窓際に置いた机の上にも、軸だの法帖だの畫集だのが雜然と堆く盛り上つてゐる。だから中央に敷いた古絨毯も、四方に並べてある書物のおかげで、派手なるべき赤い色が僅ばかりしか見えてゐない。しかもそのまん中には小さな紫檀の机があつて、その又机の向うには座蒲團が二枚重ねてある。銅印が一つ、石印が二つ三つ、ペン皿に代へた竹の茶筒、その中の萬年筆、それから玉の文鎭を置いた一綴りの原稿用紙——机の上にはこの外に老眼鏡が載せてある事も珍しくない。その眞上には電燈が煌々と光を放つてゐる。傍には瀬戸火鉢の鐵瓶が蟲の啼くやうに沸つてゐる。もし夜寒が甚しければ、少し離れた瓦斯煖爐にも赤々と火が動いてゐる。さうしてその机の後、二枚重ねた座蒲團の上には、何處か獅子を想はせる、脊の低い半白の老人が、或は手紙の筆を走らせたり、或は唐本の詩集を繙いたりしながら、端然と獨り坐つてゐる。……

漱石山房の秋の夜は、かう云ふ蕭條たるものであつた。

漱石山房の冬

わたしは年少のW君と、舊友のMに案内されながら、久しぶりに先生の書齋へはひつた。書齋は此處へ建て直つた後、すつかり日當りが惡くなつた。それから支那の五羽鶴の毯も何時の間にか大分色がさめた。最後にもとの茶の間との境、更紗の唐紙のあつた所も、今は先生の寫眞のある佛壇に形を變へてゐた。

しかしその外は不相變である。洋書のつまつた書棚もある。「無絃琴」の額もある。先生が毎日原稿を書いた、小さい紫檀の机もある。瓦斯煖爐もある。屏風もある。緣の外には芭蕉もある。芭蕉の軒を拂つた葉うらに、大きい花さへ腐らせてゐる。銅印もある。瀬戸の火鉢もある。天井には鼠の食ひ破つた穴も、……

わたしは天井を見上げながら、獨り言のやうにかう云つた。

「天井は張り換へなかつたのかな。」

「張り換へたんだがね。鼠のやつにはかなはないよ。」

Mは元氣さうに笑つてゐた。

十一月の或夜である。この書齋に客が三人あつた。客の一人はO君である。O君は綿拔瓢一郎と云ふ筆名のある大學生であつた。あとの二人も大學生である。しかしこれはO君が今夜先生に紹介したのである。その一人は袴をはき、他の一人は制服を着てゐる。先生はこの三人の客にこんなことを話してゐた。「自分はまだ生涯に三度しか萬歳を唱へたことはない。最初は、……二度目は、……三度目は、……」制服を着た大學生は膝の邊りの寒い爲に、始終ぶるぶる震へてゐた。それが當時のわたしだつた。もう一人の大學生、――袴をはいたのはKである。Kは或事件の爲に、先生の政後來ないやうになつた。同時に又舊友のMとも絶交の形になつてしまつた。これは世間も周知のことであらう。

又十月の或夜である。わたしはひとりこの書齋に、先生と膝をつき合せてゐた。話題はわたしの身の上だつた。文を賣つて口を餬するのも好い。しかし買ふ方は商賣である。それを一々註文通り、引き受けてゐてはたまるものではない。貧の爲ならば兎も角も、慎むべきものは濫作である。先生はそんな話をした後、「君はまだ年が若いから、さう云ふ危險などは考へてゐまい。それを僕が君の代りに考へて見るとすればだね」と云つた。わたしは今でもその時の先生の微笑を覺えてゐる。いや、暗い軒先の芭蕉の戰ぎも覺えてゐる。しかし先生の訓戒には忠だつたと云ひ切る自信を持たない。

更に又十二月の或夜である。わたしはやはりこの書齋に、瓦斯煖爐の火を守つてゐた。わたしと一しよに坐つてゐたのは先生の奥さんとMとである。先生はもう物故してゐた。Mとわたしとは奥さんにいろいろ先生の話を聞いた。先生はあの小さい机に原稿のペンを動かしながら、床板を洩れる風の爲に惱まされたと云ふことである。しかし先生は傲語してゐた。「京都あたりの茶人の家と比べて見給へ。天井は穴だらけになつてゐるが、兎に角僕の書齋は雄大だからね。」穴は今でも明いた儘である。先生の歿後七年の今でも……

その時若いW君の言葉はわたしの追憶を打ち破つた。

「和本は蟲が食ひはしませんか？」

「食ひますよ。そいつにも弱つてゐるんです。」

Mは高い書棚の前へW君を案内した。

三十分の後、わたしは埃風に吹かれながら、W君と町を歩いてゐた。

「あの書齋は冬は寒かつたでせうね。」

W君は太い杖を振り振り、かうわたしに話しかけた。同時にわたしは心の中にありありと其處を思ひ浮べた。あの蕭條とした先生の書齋を。

「寒かつたらう。」

わたしは何か興奮の湧き上つて來るのを意識した。が、何分かの沈默の後、W君は又話しかけた。

「あの末次平藏ですね、異國御朱印帳を檢べて見ると、慶長九年八月二十六日、又朱印を貰つてゐますが、……」

わたしは默然と歩き續けた。まともに吹きつける埃風の中にW君の輕薄を憎みながら。

日記

京都日記

光悅寺

光悅寺へ行つたら、本堂の横手の松の中に小さな家が二軒立つてゐる。それがいづれも妙に納つてゐる所を見ると、物置きなんぞの類ではないらしい。らしい所か、その一軒には大倉喜八郎氏の書いた額さへも懸つてゐる。そこで案內をしてくれた小林雨郊君をつかまへて、「これは何です」と尋ねたら、「光悅會で建てた茶席です」と云ふ答へがあつた。

自分は急に、光悅會がくだらなくなつた。

「あの連中は光悅に御出入を申しつけた氣でゐるやうぢやありませんか。」

小林君は自分の毒口を聞いて、にやにや笑ひ出した。

「これが出來たので鷹ケ峯と鷲ケ峯とが續いてゐる所が見えなくなりました。茶席など造るより、あの邊の雜木でも拂へばよろしいにな。」

小林君が洋傘で指さした方を見ると、成程もぢやもぢや生え繁つた初夏の雜木の梢が、鷹ケ峯の左の裾を、鬱陶しく隱してゐる。あれがなくなつたら、山ばかりでなく、向うに光つてゐる大竹藪もよく見えるやうになるだらう。第一その方が茶席を造るよりは、手數がかからないのに違ひない。

それから二人で庫裡へ行つて、住職の坊さんに寶物を見せて貰つた。その中に一つ、銀の桔梗と金の薄とが入り亂れた上に美しい手蹟で歌を書いた、八寸四方位の小さな軸がある。これは薄の葉の垂れた工合が、殊に出來が面白い。小林君は專門家だけに、それを床柱にぶら下げて貰つて、「よろしいな。銀もよう燒けてゐる」とか何とか云つてゐる。自分は數島を卿へて、まだ佛頂面をしてゐたが、やはりこの繪を見てゐると、落着きのある、朗な好い心もちになつて來た。

が、暫くすると住職の坊さんが、小林君の方を向いて、こんな事を云つた。

「もう少しすると、又一つ茶席が建ちます。」

小林君もこれには聊か驚いたらしい。

「又光悅會ですか。」

「いいえ、今度は個人でどざいます。」

自分は忌々しいのを通り越して、へんな心もちになつた。一體光悅をどう思つてゐるのだか、

光悅寺をどう思つてゐるのだか、もう一つ序に鷹ケ峯をどう思つてゐるのだか、かうなると、到底自分には分らない。そんなに茶席が建てたければ、茶屋四郎次郎の邸跡か何かの麥畑でも、もつと買占めて、むやみに圍ひを並べたらよからう。さうしてその茶席の軒へ額でも提灯でもぺたぺた一面に懸けるが好い。さうすれば自分も始めから、わざわざ光悅寺などへやつて來はしない。さうとも。誰が來るものか。

後で外へ出たら、小林君が「好い時に來ました。この上茶席が建つたらどうもなりません。」と云つた。さう思つて見れば確に好い時に來たのである。が、一つの茶席もない、更に好い時に來なかつたのは、返す返すも遺憾に違ひない。——自分は依然として佛頂面をしながら、小林君と一しよに竹藪の後に立つてゐる寂しい光悅寺の門を出た。

竹

或雨あがりの晩に車に乘つて、京都の町を通つたら、暫くして車夫が、どこかへつけますか、どこへつけやはりますとか、何とか云つた。どこへつけるつて、宿へつけるのにきまつてゐるから、宿だよ、宿だよと桐油の後から、二度ばかり聲をかけた。車夫はそのお宿がわかりませんと云つて、往來のまん中に立ち止まつた儘、動かない。さう云はれて見ると、自分も急に當惑した。

宿の名前は知つてゐるが、宿の町所は覺えてゐない。しかもその名前なるものが、甚平凡を極めてゐるのだから、それだけは、いくら賢明な車夫にしても到底滿足に歸られなからう。

困つたなと思つてゐると、車夫が桐油を外してこの邊ぢやおまへんかと云ふ。提灯の明りで見ると、車の前には竹藪があつた。それが暗の中に萬竿の青をつらねて、重なり合つた葉が寒さうに濡て光つてゐる。自分は大へんな所へ來たと思つたから、こんな田舍ぢやないよ、横町を二つばかり曲ると、四條の大橋へ出る所なんだと說明した。すると車夫が呆れた顏をして、ここも四條の近所どすがなと云つた。そこで、ええ、さうかね。ぢやもう少し賑かな方へ行つて見てくれ、さうしたら分るだらうと、まあ一時を糊塗して置いた。所がその儘、車が動き出して、とつつきの横丁を左へ曲つたと思ふと、突然歌舞練場の前へ出てしまつたから奇體である。それも丁度都踊りの時分だつたから、兩側には祇園團子の赤い提灯が、行儀よく火を入れて並んでゐる。自分は始めてさつきの竹藪が、建仁寺だつたのに氣がついた。が、あの暗を拂つてゐる竹藪と、この陽氣な色町とが、向ひ合つてゐると云ふ事は、どう考へても、讃のやうな氣がした。その後、宿へは無事に辿りついたが、當時の狐につままれたやうな心もちは、今日でもはつきり覺えてゐる。……

それ以來自分が氣をつけて見ると、京都界隈にはどこへ行つても竹藪がある。どんな賑な町中

でも、こればかりは決して油斷が出來ない。一つ家並を外れたと思ふと、すぐ竹藪が出現する。と思ふと、忽ち又町になる。殊に今云つた建仁寺の竹藪の如きは、その後も祇園を通りぬける度に、必ず棒喝の如く自分の眼前へとび出して來たものである。……

が、慣れて見ると、不思議に京都の竹は、少しも剛健な氣がしない。如何にも町慣れた、やさしい竹だと云ふ氣がする。根が吸ひ上げる水も、白粉の匂ひがしてゐさうだと云ふ氣がする。もう一つ形容すると、始めから琳派の畫工の筆に上る爲に、生えて來た竹だと云ふ氣がする。これなら町中へ生えてゐても、勿論少しも差支へはない。何なら祇園のまん中にでも、光悅の蒔繪にあるやうな太いやつが二三本、玉立してゐてくれたら、猶更以て結構だと思ふ。

裸根も春雨竹の靑さかな

大阪へ行つて、蕪村さんに何か書けと云はれた時、自分は京都の竹を思ひ出して、こんな句を書いた。それ程竹の多い京都の竹は、京都らしく出來上つてゐるのである。

舞妓

上木屋町のお茶屋で、酒を飲んでゐたら、そこにゐた藝者が一人、むやみにはしやぎ廻つた。それが自分には、どうも躁狂の下地らしい氣がした。少し氣味が惡くなつたから、その方の相手

を小林君に一任して、隣にゐた舞妓の方を向くと、これはおとなしく、椿餅を食べてゐる。生際の白粉が薄くなつて、健康らしい皮膚が、黒く顔を出してゐる丈でも、こつちの方が遙に頼もしい氣がする。子供らしくつて可愛かつたから、體操を知つてゐるかいと訊いて見た。すると、體操は忘れたが、縄飛びなら覺えてゐると云ふ答へがあつた。ちややつてお見せと云ひたかつたが、三味線の音がし出したから見合せた。尤もさう云つても、恐らくやりはしなかつたらう。

この三味線に合せて、小林君が大津繪のかへ唄を歌つた。何でも文句は半切に書いたのが内にしまつてあつて、それを見ながらでないと、理想的には歌へないのださうである。時々あぶなくなると、そこにゐた二三人の藝者が加勢をした。更にその藝者があぶなくなると、おまつさんなる老妓が加勢をした。その色々の聲が、大津繪を補綴して行く工合は、丁度張り交ぜの屏風でも見る時と、同じやうな心もちだつた。自分は可笑しくなつたから、途中であはは と笑ひ出した。すると小林君もそれに釣りこまれて、とうとう自分で大津繪を笑殺してしまつた。後はおまつさんが獨りでしまひまで歌つた。

それから小林君が、舞妓に踊を所望した。おまつさんは、座敷が狭いから、唐紙を明けて、次の間で踊ると好いと云ふ。そこで椿餅を食べてゐた舞妓が、素直に次の間へ行つて、京の四季を踊つた。遺憾ながらかう云ふ踊になると、自分にはうまいのだかまづいのだかわからない。が、

花簪が傾いたり、だらりの帶が動いたり、舞扇が光つたりして、甚綺麗だつたから、鴨ロオスを突つきながら、面白がつて眺めてゐた。

しかし實を云ふと、面白がつて見てゐたのは、單に綺麗だつたからばかりではない。舞妓は風を引いてゐたと見えて、下を向くやうな所へ來ると、必ず恰好の好い鼻の奥で、春泥を踏むやうな音がかすかにした。それがひねつこびた教坊の子供らしくなくつて、如何にも自然な好い心もちがした。自分は醉つてゐて、妙に嬉しかつたから、踊がすむと、その舞妓に羊羹だの椿餅だのをとつてやつた。もし舞妓にきまりの悪い思ひをさせる惧がなかつたなら、お前は丁度五度鼻洟を吸つたぜと、云つてやりたかつた位である。

間もなく躁狂の藝者が歸つたので、座敷は急に靜になつた。窓硝子の外を覗いて見ると、廣告の電燈の光が、川の水に映つてゐる。空は曇つてゐるので、東山もどこにあるのだか、判然しない。自分は反動的に氣がふさぎ出したから、小林君に又大津繪でも唄ひませんかと、云つた。小林君は脇息によりかかりながら、子供のやうに笑つて、いやいやをした。やはり大分醉がまはつてゐたのだらう。舞妓は椿餅にも飽きたと見えて、獨りで折鶴を拵へてゐる。おまつさんと外の藝者とは、小さな聲で、誰かの噂か何かしてゐる。——自分は東京を出て以來、この派手なお茶屋の中で、始めて旅愁らしい、寂しい感情を味つた。

現代叢書
— 41 —

（出文協承認 ア460311號）

昭和十八年七月十五日初版印刷
昭和十八年八月十五日初版發行（四〇〇〇部）

芥川龍之介の人と作　下卷
定價（特）一圓八十錢
特別行爲稅相當額五錢
合計賣價一圓八十五錢

編者　室生犀星
發行者　竹内富子
東京市神田區西神田二ノ二二
印刷者　堀内文治郎
東京市神田區三崎町二ノ二三
印協番號　東三三一四
配給元　日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二ノ九
發行所　三笠書房
東京市神田區西神田二ノ二二
電話九段四〇一三番
振替東京二二〇九六番
會員番號一三二〇一五番

小社の出版物中に、萬一落丁亂丁その他不備の品がありました場合は早速お取換へ致しますから、御手數ながら本社宛へお送り下さい。

現代叢書既刊書目

谷川徹三 哲學的文學 (1) 一・五〇
武者小路實篤 母と子 (2) 一・八〇
澁井孝作 折柴隨筆 (3) 一・五〇
プウシキン 中山省三郎 オネェギン (4) 一・八〇
ヘッセ 高橋健二 世界文學をどう讀むか (5) 一・〇〇
ヒットラー 大久保康雄 わが鬪爭 (6) 一・五〇
象常清佐 日本音樂と西洋音樂 (7) 一・四〇
室生犀星 芭蕉襍記 (8) 一・八〇
中山太郎 歴史と民俗 (9) 一・五〇
圭室諦成 道元 (10) 一・五〇
川端康成 小說の構成 (11) 一・五〇
伊東忠太 建築の學と藝 (12) 一・八〇
正宗白鳥 文學修業 (13) 一・八〇
ノードホフ、ホール 大久保康雄 颱風 (14) 一・六〇
ニイチェ 永瀨平一 善惡の彼岸 (15) 一・八〇 近日發賣
齋藤磯雄 リラダン (16) 一・五〇
石川淳森鷗外 (17) 一・五〇
鼓常良 西洋美學史上 (18) 一・八〇
ラヴリン 壽岳文章 トルストイ (19) 一・六〇
ブルウスト 齋藤磯雄他 愉しみと日日 (20) 一・六〇
カント 坂田德男 判斷力批判上 (21) 二・〇〇

現代叢書既刊書目

藤澤衞彥 明治風俗史上 (22) 一・八〇
谷川徹三 志賀直哉の作品下 (32) 一・五〇
中山太郎 生活と民俗 (23) 一・八〇
寺田彌吉 親鸞 (33) 一・八〇 近日發賣
鼓常良 西洋美學史下 (24) 一・八〇
岸田國士 幸福の森 (34) 一・八〇
香取秀眞 日本の鑄金 (25) 二・〇〇
藤平武雄 哲學への出發 (35) 二・〇〇
龍居松之助 近世の庭園 (26) 二・〇〇
小杉放庵 池大雅 (36) 一・九〇
中川一政 美術の眺め (27) 二・〇〇
古谷綱武 川端康成 (38) 一・五〇
尾崎喜八 詩人の風土 (28) 一・八〇
岩上順一 横光利一 (39) 一・五〇
秋山六郎兵衞 獨逸文學史 (42) 二・〇〇
藤澤衞彥 明治風俗史下 (29) 一・八〇
大行慶雄 生命と進化 (44) 二・五〇
龜井勝一郎 日本の女神 (30) 一・八〇
カント 坂田德男 判斷力批判下 (45) 二・〇〇 近日發賣
谷川徹三 志賀直哉の作品上 (31) 一・五〇

以下續刊

K 57

953
165

終